



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真宗
浄土本願

第103号 令和8年1月

プンダリーカ

びやくれんげ
一白蓮華一

光に遇う

本願寺派 布教使 西原 祐治

元旦がんたんのことです。妻つまが「珍しい人から年賀状ねんがじやうが届とどいています」と言いました。その年賀状は八年前にお浄土じやうとへ往いった父から、私にあてられた年賀状でした。実は、この年賀状は私が出したものでした。正月しょうがつを迎むかえる一週間前のことです。来年は何を大切にして過すごそうかと考えていた時、「そうだ、大切な言葉を、父からの年賀状という形にして自分に届けよう」と思ったのです。そして「珍しい人から……」となったのでした。自分で書いたものではありませんが、書かれています言葉が浄土から届けられたような気持ちになり、とても有り難がたい縁えんとなりました。（中略）

おそらく正月に思ったことは、思っただけならば、時の過ぎゆくほどに失念しつねんしていたのだと思います。しかし、父からの年賀状として届いて見ると、大切な言葉

はいつも私の思いの中にあります。

さてその父からの年賀状には「ご報謝ほうしゃの一年を送おくってください。父 正念」とあります。ご報謝とはお礼れいするということです。しかし、お礼や感謝かんしゃにもいろいろあります。もう三十数年も前のことです。あるご家庭かていに、法事ほうじのご縁をいただいて伺うかがった時のことです。読経どききやうを終え、お茶を飲みながら世間話せけんわなしをしていました。すると家の方が、「今の若い人は感謝という言葉も知らない」と言われます。会話かいわの内容ないようは、個人商店こじんしょうてんであるそのお宅たくに、高校を卒業そつぎやうした一人の若者しやうしやくが就職してきました。話の流れの中で「感謝しなさい」と言っただけです。するとその青年から「奥さん、感謝って何ですか」という言葉が返かえってきたというのです。

私も話題わだいに同調どうちやうして、感謝ということを知っている側に立たち「そうですね、そうですね」と相づちを打ちました。その相づちを打つ私の心の隅すみに、感謝の心は良い心、仏さまに近ちかい心という価値判断かちはんだんがありました。

その日、お寺へ帰かえってぼんやりしていると、突然とつぜん、仏さまからしかられたような感覚かんかくをもったのです。その感覚を言葉にすれば、「お前は勝手かつてだなあ」ということです。何が勝手かといえ、自分に都合つちやうがよいと何度でも感謝するが、自分に不利益ふりえきがあつたり都合が悪いことであれば、感謝どころではない。それがお前の現実げんじつではないか、ということです。私の感謝についての浅い理解りかいを言い当てられたような気持ちになり、恥はずかしく思いました。誠にその通りです。私が抱いだく感謝の心は仏さまに近い心どころか、私という我欲がよく、自己中心じこちゆうしん的な心を一步も離はなれていないのです。それが私の偽いつわりのない姿すがただったのでした。

この我欲によつた感謝ではなく、すでに恵めぐまれていることへの気づきを縁とした感謝が大切なのです。そして何よりも大事なことは、私の感謝が我欲を一步も離れていないという気づきも、すでに恵まれていることへの気づきも、ともに阿弥陀さまの智慧ちえのみ光ひかりによつてもたらされるということです。

『浄土真宗 やわらか法話3』（本願寺出版社）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



saishoji.info

さいしやうじ
西照寺宗派 真土
浄願寺

第104号 令和8年2月

プンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—

死に目を背ける私

本願寺派 勸学 内藤 知康

仏教が今ここににいる私にとつての問題だというのは、その通りです。

しかし、今ここににいる私は、過去の私、未来の私と無関係に存在しているのではありません。過去の私を振り返り、未来の私を見すえてこそ、今ここにいる私が明確になるのです。

さて、今ここににいる私は生きています。しかし生きていくということと死ぬということと切り離すことができません。仏教では、他と無関係にそのことだけで独立してあるということはありません。あり得ないと考えます。仏教では、親と子とが同年齢であるという言い方がされます。不思議な言葉ですが、その人が親になったのはその子が生まれたからです。つまり、その子が生まれてからの年数と、その子の親になつてからの年数は同じだということ

になります。親と子とが同年齢であるというのは、そのことを言っています。親とは何かを考える時に、子を抜きにして考えることはできません。

そして、生きているということと死ぬということとの関係も、どちらか一方だけを考えることはできないという意味で、親と子との関係と同じです。生きているものは必ず死にます。決して死なないものは、もともと生きていないものです。美しい生け花は生きていますのでいずれ枯れてしまいます。造花は生きていないので決して枯れません。生きているものは必ず死ぬというのは、逆に言いますと、必ず死ぬからこそ生きているのです。

仏教では今ここににいる私を問題にして、今ここににいる私は必ず死ぬ身であるからこそ今生きているのだと考えます。しかも、善導大師が私たちの命を今すぐ消えるかもしれない風の中の灯火にたとえられたように、私の死はいつおとずれて

くるのかわかりません。また、仏教では念死といつて、自分自身の死を念じることが説かれています。念死というのは、私の首を切る刀が振り下ろされ今や首に触れる寸前という状況を、あたかも現実のように体感することだと言われた先生がおられました。今すぐ死ぬかもしれない私ということを見すえてこそ、今生きている私を本当に見すえたことになるのです。医師の宣告を受けて、余命いくばくもない私ということを真正面から見すえた時に、今生きているということの素晴らしさが本当にわかったとの体験談もあるようです。(中略)

命終わつてお浄土に生まれるという教えは、否応なく自分自身の死という現実を目を向けさせるといふ大事なはたらきがあることを忘れてはなりません。死後の問題を今の自分自身と無関係な問題と考える人は、実は死を今の自分と無関係と考えているのです。

『どうなんだろう？親鸞聖人の教えQ&A』（本願寺出版社）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています